

## あとがき

アーロン・コーブランド氏について、修士課程以来、数年にわたり探究してきた。しかし、大学院研究のほぼ終盤に到るまで、氏は、筆者に心を開いてはくれなかったようだ。「最もアメリカ的な作曲家」とはいうが、しかし、その知られた形容は全くの気休めに過ぎない。氏は、あまりにも多彩にして、多層に多面的な存在であり、その意味では、まさに「アメリカ」そのものにほかならなかった。かつて村上龍が「『アメリカらしさ』なるものは問うてはいけないものの一つ」とも述べたと知ったのは、奇しくも研究がもっとも進捗をみない頃であった。筆者にとっては、研究の手がかりを探すのも、まるで茫漠たる海岸にて所定の砂粒一つを見つけるがごとき気の遠い作業となった。やっと見つけた「砂粒」も、しかし、氏の多様性の前には、すぐに多くの矛盾をみせ体裁を失した。ときに無益とも思えた繰り返しの末、筆者の突破口となったのは、やはり、かつて師が教えてくれた〈図と地〉の視点であった。「すべての見えるものは、図と同じような意味では見えることのない地を含んでおり」〔メルロ=ポンティ〕である、と。

本論の執筆には、あまりにも多くの先達の支えがあった。最初に、筆者を受け入れて下さり、論文提出まで導いて下さった主査の西岡龍彦教授に万謝する。修士課程時代の指導教員として、本研究の初期に、映画やアメリカ文化、そして、藝術と文化がもつ豊かな広がりをご教示下さった東京学芸大学・畑中佳樹教授の学恩に謝意を表す。そして、ご助言を賜った副査の亀川徹教授、毛利嘉孝教授、丸井淳史准教授、福中冬子准教授に感謝する。「砂粒」探しのごとき日々の地味なる研究では、外部者にもかかわらず、いつも、その優れた蔵書を快く利用させて下さった和光大学附属梅根記念図書館の皆さまに感謝する。勤務先の女子美術大学において、かつて、本研究をめぐるつたない話にも付き合ってくれた相模原校地メディアアート学科時代のゼミ生たちに感謝する。いつも励まして下さった武蔵野美術大学・故小島常成教授、女子美術大学・川口吾妻教授、カトリック東京大司教区・幸田和生補佐司教と天佑に感謝する。短い面会の中で、惜しげなく貴重なる研究的視点を示唆して下さい下さった東京大学・渡辺裕教授に感謝する。現地訪問に快く応じて下さったアーロン・コーブランド・ハウス藝術監督マイケル・ボリスキン氏、及び本論に先行するすべてのコーブランド研究者に感謝する。アーロン・コーブランド氏に感謝する。そして、北の大地から研究を応援してくれた父・石井共之、母・石井みよに感謝する。最後に、このもっとも困難なる時期を共に生き、共に乗り越えてくれた妻・石井亮子に、あらためて感謝の言葉を述べるとともに、この論文のすべてを捧げる。

2016年10月31日 若葉台にて

石井 拓洋